【史料紹介】

「中川家史料」田上綽俊書翰

木多　悠介　小林　愛恵
十河　和貴　長谷川澄夫

はじめに

田上綽俊（たがみしゃくしゅん）（一八三一～一八九三）は立命館大学創立者の中川小十郎が、少年時代に学問の手ほどきをうけた漢学教師である(一)。一地方教師の経歴や書翰から、改めてその功績や特異な思想をうかがえるものではないが、小十郎に学問を教授し、その学業の継続を励まし、馬路村の人々とのかかわりを持ち続けた一教師の書翰から、明治初年の在村知識人の動静の一端をうかがうことができる。

立命館史資料センターでは、小十郎の養家および生家の史料を所蔵、「中川家史料」として調査・整理・保存しており(二)、その中に小十郎や養父中川武平太宛の田上の書翰が一〇〇点余り含まれている。本稿はその書翰を整理・翻刻・紹介するものである。

まず、本稿では、田上書翰のうち中川小十郎宛書翰二二点（封筒含む）を編年順に翻刻、解説を付して紹介する。つぎに参考史料として、石川県七尾市の渡邊齋氏所蔵史料から、少年時代を回想する小十郎書翰一

点を翻刻・紹介した。史料の大半を占める武平太宛などの書翰についても翻刻文を作成したが、紙数の制約もあり部内資料として保管するにとどめた。

さいごに、田上書翰の一覧を横書きの表として作成した。「中川家史料目録」の史料名は「書簡」とのみ記され、その内容や年代の比定まではおこなっていなかったが、あらためてその内容をもとに一点ごとに史料名を付し（〔新年賀詞〕など）、消印や内容の一部を備考として紹介した。封筒の宛先・差出住所・消印および記載内容から年代の比定をおこない、発信年代順に一覧表を作成した。

田上綽俊

田上は滋賀県湖南地方（現 大津市田上）出身とも伝えられているが(三)、肥前国小城郡多久の漢学者である。小城藩（佐賀藩の支藩）領の多久では、藩主多久茂文が領内に孔子を祀る聖廟を建て、儒教による庶民の教化をはかった。そこでは東原庠舎という教育機関も営まれ、幕末には漢詩文や書画にも優れた草場佩川が活躍した。佩川の学統に連なる田上の年譜を、『多久市史』の記述をもとに、中川家史料の田上書翰の記述を加わえて示すと左記の如くである(四)。

天保二　（一八三一）年　生、字は子裕、通称馬之助、号は湖南三雪道人
嘉永二　（一八四九）年　草場佩川に入門
安政二　（一八五五）年　東原庠舎の教授、「司農官」となる

慶応四　（一八六八）年　戊辰戦争に従軍、会津若松から白河に転戦、翌年酒田県権大属となる
明治二　（一八六九）年　帰郷、東原庠舎が多久郷学校として佐賀県公立学校となり辞職
明治七　（一八七四）年　丹波に遊学、馬路小学校（致遠館）の教師となり、家塾でも子弟の教育にあたる
明治一〇（一八七七）年　京都の聖護院に家塾を開く、翌年能登七尾に赴任、帰京後下京区で開塾
明治一二（一八七九）年　久留米を経て帰郷
明治一三（一八八〇）年　多久県立中学誘致請願に加わる
明治一四（一八八一）年　多久の有志が「丹邱義塾」を興し教師に推挙される、傍ら私塾「邛須舎」を開き子弟の教育に専念する
明治二六（一八九三）年　五月一一日没（六一歳）、尾越に葬られる

中川小十郎宛書翰

本稿では中川小十郎宛の田上綽俊書翰二二点（封筒含む）を翻刻・紹介した。参考として息子の田上致俊（芳太郎）書翰も含めた。書翰のそれぞれに簡単な解説および年代比定の根拠を末尾に付した(五)。

小十郎は慶応二（一八六六）年、丹波国馬路村（現 京都府亀岡市馬路町）の郷士中川禄左衛門・さきのもとに生まれた。六歳で同村内の叔父中川武平太（禄左衛門の実弟）・みきの養子となった。小学校に進むと昼は学校で、夜は田上の家塾で学ぶこととなる。やがて小学校の課程を終えると、田上の京都への転居に従い

聖護院の家塾に入塾、田上が能登七尾に転じると、小十郎もそれに従うなど、田上のもとで多感な少年時代を送る。

明治一二年、小十郎は叔父中川謙二郎（実母さきの弟）に伴われ東京遊学に旅立つ。上京した小十郎は東京府第一中学を経て、予備校の成立学舎に学び、明治一五年には東京専門学校に進学、明治二二年に帝国大学に進学する。書翰の宛先からは東京における小十郎の動静をうかがうことができる(六)。

小十郎の上京後も田上は小十郎や武平太との書翰のやりとりを継続していた。田上宛の小十郎書翰は未見であるが、田上書翰には「貴翰云々」「一書云々」の語句があり、小十郎からの来翰もあったことをしめしている。田上の書翰には、小十郎の学事を激励し（二一四三三）、小十郎の病気入院の折には懇切な見舞状を送るなど（二一四六九）、絶えることなく交信を続けている。田上の息子の致俊が上京した時には小十郎のもとを訪ねるなど、東京での交遊は深められていたようである（一二四八〇）。

明治二〇年、小十郎は雑誌『いらつめ』を発表して言文一致の創作活動を始めるが、自らの投稿論文を恩師の田上に送付、その後も自らの投稿記事所載の『教育雑誌』や、訳書『実用経済学』を田上のもとに送付している。愛弟子の著作を手にして、その向学を安堵・称揚する老教師の姿を想起することができる。恩師の諸書翰は小十郎にとって生涯の宝物でもあったようである(七)。

中川武平太宛書翰

中川家史料に含まれる田上書翰の大半は、小十郎の養父武平太宛のものや武平太を通じて馬路村の人たち

に送られた書翰である(八)。

京都や能登時代の書翰は書中に「飛脚便」などとあって、年代比定の困難なものもあるが、九州へ帰郷後の書翰には「郵書云々」とあって封筒には消印もあり、前掲田上の年譜や差出住所から年代を比定し、田上の動静をうかがうことができる(九)。

田上が丹波馬路の学校に招聘された経緯は不明である。同じ頃同郷の草場船山（せんざん）（佩川の息子）も上京して開塾しており、京都の漢学者たちとの繋がりもあったようである。養父武平太たちは戊辰戦争では西園寺公望の山陰道鎮撫に「弓箭組」を率いて従軍していたが、田上もまた東北の戦地に従軍している（一一四九三）。田上が馬路に招聘されたのは、武平太が戸長の時代で、教育に大きな期待が寄せられていた頃であった。

馬路を辞した田上は京都に、そして能登七尾に転じ、半年後また京都に戻る。年齢も高じ体調も壊したのか、小十郎の東遊の時と合せるかのように、田上は明治一二年には久留米を経由して郷里の多久へ引きあげている。

郷里に戻った田上は、農桑にいそしむ傍ら、郷里の学校教育に参画しようとしている。当時の長崎県下の小城郡は中学校設置問題などの混乱の渦中にあり、田上もこれに巻き込まれたようである。田上は学校に出講するとともに、独自に塾生をとり、子弟の教授に当たっていたようである。

田上は毎年新年の賀詞や暑中見舞いを馬路の旧知の人々へ書き送っているが、戸長の武平太はその窓口となっていた。在村時には「垢付之浴衣迄御洗濯」（一一五〇一）などと、身の回りの世話にあずかった武平太夫人に対して、墓誌の撰文に応じるなど、深い交友を続けていたようである。

そして武平太宛書翰の末尾には「御賢息様（中略）御勉強」などの数行がほぼ全てに認められている。京都の塾への勧誘、能登遊学の案内、能登への旅路の紀行にはじまり、東京遊学後も小十郎の動静をうかがうことのできる記述があり、今後の小十郎研究にとって有用な史料となるだろう。

さいごに

田上綽俊の書翰をもとに、明治初年の在村漢学教師の足どりをたどってみた。田上は幕末期に儒学を学び、明治の学校教育制度の揺籃期に、学校や家塾で子弟の育成にあたった多くの教育者の一員であった。各地に彼のような先学を顕彰する墓誌や石碑が多く残されている(一〇)。

帰郷後の田上の書翰には、地方の教育事情を憂慮する所感の一端が述べられており、明治初年の地域教育史の史料として有用なものとなるだろう。また、農事や風水災・コレラの流行など、明治一〇から二〇年代の佐賀県の景況を報知する文面は、断片的ではあっても佐賀の地域史の史料として有用なものと思われる。

そして何よりも、本書翰は田上と弟子の中川小十郎や馬路村の人たちとの交情の様相を記録した貴重な史料である。一老教師の懊悩を綴った文面は、外交について「外国之侮辱ヲ受ケテハ愛国之大義ニ背キ」（二一四七四）と憤り、教育についても「堪杞憂候所之者一ツアリ政党是也」として、民権思想を忌避するなど、漢学を学んだナショナリストとしての主張である。しかし、弟子小十郎の成長を喜ぶ姿には、その頑迷さは微塵もうかがえない。丹波や能登、九州の地方から社会の趨勢をうかがう老教師の呟きの中からは、次代を担う人々への輿望を看取することができる。とすれば、そこには田上の薫陶をうけ、地方から東京へ遊

学した小十郎の思想と通底するものがある(一一)。中央ではなく地方（丹波や九州、樺太や台湾）から、私学や夜学の大衆教育の場を提供した、教育者中川小十郎の思想の基層を覗き見ることできるかも知れない。漢学を通した田上の教えが、小十郎や丹波の人々の素養となり、近代の思潮の背骨となっていったのであろう。

田上書翰に同封された一片の詩賦には馬路の人びとへの温かいメッセージが込められている（一一五〇六）。

農余来伴読書帷　情緒懇懃欲別時
文酒鎮感知幾指　始終如一捨君誰

留別　中川彪一雅盟　田上綽俊　拝草

明治初年の一漢学教師の書翰の翻刻に際しては、癖のある書体と漢文独特の言い回しや、四文字熟語など、その解読に苦労した。無名な人物ではあっても一〇〇点余の書翰を読むうちに、いつしか田上の為人に惹かれる作業でもあった。書翰の翻刻・校正・一覧表の作成にあたっては、木多悠介・小林愛恵・十河和貴・長谷川澄夫の四名が協力して作業をおこなった。解題の文責は長谷川にあることを付記しておく。

注

（一）田上と中川のかかわりについては、『立命館百年史』第一巻（立命館百年史編纂委員会、一九九九年）、松本皎「学園創立者中川小十郎の事績抄」（『立命館百年史紀要』第二号、一九八四年）、武知正晃「中川小十郎の青少年期の教育事情について―特に東京専門学校入学問題を中心に―」（『立命館百年史紀要』第六号、一九八六年）、長谷川澄夫「中川小十郎の少年時代―田上綽俊書簡をよむ―」、藤野真挙「明治ナショナリズムと中川小十郎のキャリア形成」（立命館 史資料センター『立命館創立者生誕一五〇年記念中川小十郎研究論文・図録集』、二〇一七年）。

（二）「中川家史料」については本誌・寺澤論文参照。
（三）野中史雄「墓碑銘調査管鮑会誌についてほか」（『丹邱の里』一三号、多久市郷土研究会、二〇〇〇年）二二ページ。
（四）多久市史編さん委員会『多久市史　人物編』（多久市、二〇〇八年）六二ページ。
（五）小十郎宛書翰の多くは中川家史料のうち中川保次氏のもとで別置保管されていた。これらは小十郎が自らの手もとで保管していたものと思われる。
（六）東京における小十郎の住所は以下の通りである。

明治一二年八月一四日　東京赤坂区赤坂台町一一番地高田殿方（一二五〇五－⑤）
明治一二年一〇月一七日　東京府神田通松住町七番地高橋喜太郎方（一二五〇－⑥）
明治一五年三月一三日　東京赤坂区台町十一番地高田政久殿方（一二四八六）
明治一七年一二月一三日　東京小石川区音羽四丁目二四番地中川謙次郎方（一二四八五）
明治一九年一月二日　東京小石川区表町五二番地中川謙次郎方（一二四八八）
明治二〇年一月二八日　東京本郷区駒込西片町十番地中川謙次郎方（一二四八一）
明治二三年二月二一日　東京小石川区指々谷町蓮■（華＋力）（一二四八三）
明治二四年一〇月一五日　帝国大学寄宿舎（一二四八二）

（七）晩年の小十郎は立命館中学の生徒たちに田上の回想を話している（「私の発見を発見する」『立命禁衛隊』一五号）。
（八）武平太宛書翰は、養家史料のうち亀岡市史編さん委員会整理分の史料で、紐括り一括されていた史料群である。
（九）田上の住所は以下の通りである。

（明治一〇年）八月一〇日　西京聖護院村三宅新七宅路地（一一四八七）
（明治一一年）三月一五日　能登国七尾府中町谷屋三郎右衛門宅（一一五一三）
（明治一一年）二月二日　西京東洞院五条下ル三丁目（的場町）（一一五〇七）
（明治一二年）九月一九日　久留米新町二丁目米屋嘉七宅（一一五四七）

（明治一二年）　長崎県小城郡多久村（二一五四一）
（明治一六年）九月二八日　佐賀県小城郡多久村（二一五四九）
※佐賀県は明治九年長崎県に統合、明治一六年五月に分離独立する。
（一〇）多久市尾越の田上の墓には門人たちの手によって墓誌が刻まれている（同註三）。また田上は同郷の草場船山の郷里の墓の墓誌の撰文を認めている。前掲野中論文二〇ページ。
（一一）前掲藤野論文二六ページ。

【中川小十郎宛田上綽俊書翰】

凡　例

一、年代比定については、消印がある場合は消印の年月日を採用し、不明の場合は内容から年代比定を行い（　）を付した。またその根拠や書翰の内容について、文末に解説を付した。

二、句読点は適宜これを付した。

三、仮名遣い・濁点・半濁点は原文のままとする。ただし変体がなは助詞も含めてすべて現在の字体に改めたが、一部のもの（而已（のみ）哉（や）歟（か））は漢字でそのまま表記した。

四、字体は原則として新字体に改め、常用漢字を使用したが、人名・地名などの固有名詞や慣習的に用いられている表現は原文の字体を尊重した。

五、明白な誤字である場合は、正字不明の場合〔ママ〕を付し、推測可能な場合は〔ママ〕の後に注記した。ただし、当時慣習的に使用されていたもので、現在では誤りとされるものに関しては特にこれを付していない。

六、判読困難な箇所は、文字相当分の■印で示した。また、文意の通じない箇所は〔ママ〕、推定できるものは〔　カ〕とそれぞれ右傍に注記した。

七、原史料に抹消がある箇所は削除した。

八、原史料に虫食い・破損があり、判読できない箇所は、その判読できない字数が判明する場合は、その字数に相当する■を記し、また、字数が不明の場合は〔　〕で表示した。字が不明で解読できない場合と区別するために、右傍に（虫食い）（破損）などと注記した。また、欠損部分が推測できる場合は〔　カ〕と注記した。

九、書翰の紹介順序は、原則年代順とし、年代不明なものは後半に史料番号順に掲載した。

二一四八三

（明治一〇年）九月一九日

〔封筒なし〕

愈御殖業奉拝祝候
扨無存寄見事之鶏卵
一重御恵披御芳情之
段不堪感佩候、何れ後便
可縷叙先々貴答まて
草々不宜
九月十九日　田上綽俊
中川小十郎様

乍末筆尊父母様方へ
宜敷御致声可被下候、
持合之小菓子聖護院
之八橋差上御咲留被下候ハハ
幸甚

◇「小菓子聖護院之八橋差上」とあり、出京した田上が聖護院に居を定めた頃のものと比定した。

二一五〇〇
（明治一一年）一一月一〇日
証
金弐円拾弐銭五厘
右慥ニ致落手候也
十一月十日　田上綽俊　（書判）
中川小十郎殿

◇小十郎の学費受領証と思われる。明治一一年は田上が能登から帰京し、下京区に居を定めた頃と考えれれる。

一二五〇五－⑤
（明治一二年）
〔封筒表〕東京赤坂区赤坂台町十一番地
高田政久殿方
中川小十郎様　平安信
〔消印　丹波桑田亀岡八・一四〕
〔封筒裏〕丹波国桑田郡馬路村投函
長崎県下小城郡多久村
田上綽俊
〔東京一■・八・一八〕

◇明治一二年の小十郎の東上直後、帰郷直前の田上が郷里の住所を認め馬路から投函した書翰の封筒と思われる。

一二五〇五－⑥
（明治一二年）一〇月一七日
〔封筒表〕東京府神田道松住町七番地
高橋喜太郎方ニて
中川小十郎殿　拝復急
〔封筒裏〕封　筑後久留米新町三丁目
米屋嘉七宅ヨリ
田上綽俊
〔消印　筑後三瀦久留米一〇・一七〕

◇年代の比定は発信住所の「久留米」による。同年一〇月付武平太宛書翰あり（二一五四二）。

一二五〇五－③
（明治一三年三月）
〔封筒表〕東京本郷区森川町三十八番■〔地〕
中川小十郎殿
三穂健義殿方　至急
〔封筒裏〕長崎県下肥前小城郡多久■〔村〕
田上綽■〔俊〕
〔消印　肥前杵築北方三・一四〕
〔消印　東京一三・三・〔一〕〔切〕〔揖〕〕

◇■は切損、年代の比定は消印による。

二一四三三
明治一五年一月三日
〔封筒表〕東京赤坂台町十一番地
高田殿宅
中川小十郎殿　平安
〔消印　肥前小城多久一・二六〕
〔封筒裏〕封　長崎県下小城郡多久
田上綽俊
〔消印　東京一五・一・二〕
望暦存端四海同風
芽出度申存候、愈御金適
可被成御趣歳奉逢祝候
弊家無恙加馬齢候間
不欲尊念候、右歳首為
御祝詞如此御坐候、恐惶謹言

一月三日　田上綽俊
中川小十郎様　机下
再伸
尓来御疎語ニ打過老概とハ
乍申大ニ致失敬候、御郷里よりも
屡御消息被下候へ共、昨春以来
何歟之事ニ取紛、一向御回答も
不仕候故、御責督之書状も参り
候位ナリ、併シ年始ニハ早速祝状
差上置候、僕ハ不相変碌々為
諸生所役自分之看書も出来兼
国家之有益となる事業ノ目的
も無之、歎息而已ナリ、兄ニハ定て
御勉強最早成功之機も相見へ
候義と存候、兎角物毎ニ実着
ヲ主眼トシテ御勉強有之度
此亦一片老婆心也
◇年代の比定は消印による。この時、小十郎は成立学舎に在学中であり学業の進捗に悩んでいた。

二一四二九

（明治一五年）一月五日
〔封筒表〕東京赤坂台町拾壱番地
高田政久殿方
中川小十郎殿　平安信
〔消印　東京一五・一・二四〕
〔消印　肥前小城多久一・一四〕
〔封筒裏〕長崎県下小城郡多久邨
田上綽俊
新禧万賀、愈御清適可被成御越歳
奉逢祝候、拙無異加齢乍憚御放念
是祈、扨昨春以来御音問も相怠り老
慨とハ乍申失敬之罪、無言可謝、御郷
里よりも御尊父様御始ヨリ度々御通信
被下候へ共、時々御回答も不仕候故、拙
之安
否ヲ愚息迄御尋問被下位之疎慵ナリ、
併シ帰郷後変則中学へ出勤、其他
ハ家内へ寄宿生も有之、家事其外
多忙而已ニテ、老慨斗りにも無之、尤近
来ハ貴郷留寓ノ時トハ相変リ、身体ハ
強壮ニ相成申候、昨夏頃ヨリ愚息胃胃
病療治ノ為メ乳牛ヲ求メ、其絞乳ノ余
瀝ヲ飲ミ候故欤と存候、当長崎県下ハ
格別相変り候義も無之、併シ近来ハ互ニ
持兇器盗横行、動転傷害ヲ蒙ル
者有之、実ニ不安心世之中、旧暦歳末
迄ハ不容易ト人心恂候、徒御開明之訳及
覆
而已、恐慌謹言
一月五日　田上綽俊
中川小十郎様
◇年代の比定は消印による。自己の近況を述べたもので二一四三三の補筆と思われる。

一二五〇五－②

（明治一五年）
〔封筒表〕東京赤坂台町十一番地高田殿
方
中川小十郎殿
至急要用
〔封筒裏〕長崎県下小城郡多久村
田上綽俊
〔消印　肥前杵築北方二・一二〕
〔消印　東京■■・二・■〕

◇年代は「赤坂台町」の宛先住所から比定。

一二四八六

明治一五年三月一三日

〔封筒表〕東京赤坂台町拾壱番地高田政久殿方

中川小十郎殿　奉答急

〔消印　肥前小城多久三・一七〕

〔封筒裏〕封　長崎県下小城郡多久村

田上綽俊

〔消印　東京一五・三・二五〕

御懇書并御写真一葉
以郵便御恵贈被下慥ニ落手
仕候。春寒愈無御障、御勉学
之段不堪欣拝候。扨御写真
致拝見候処、昔日京洛能州
辺ニて致接、提携之節とハ
大ニ改面目、絶大之状可想
雀躍之余、使家人拝見候処
皆々致敬祝候。於是乎有
所大感厚余に別於足下、
既幾歳頭童歯豁無一
事可成、其奈之何今也足下
体格之堅固其構如此、
然則精神之所向、雖勝金
石、亦何難之有、然て速成者
余之非所願也、請漸進以
為大器矣、吾郷近無可
定之事有斯、他日直可以
報知焉、於是平閣筆、頓首
三月十三日　田上綽俊
中川小十郎様　梧右

尚以年内ニハ丹波之方ヨリ
早々御祝詞被下此方よりも
一書差上置候へ共
其後御回答も無之
いつれ、此方ヨリ今一遍
托郵便候積ニ御坐候
中川有行院ハ昨年
カ東京ヲ辞シ一派ノ寺
院へ参ラレ候由、其後
帰京ニ相成候哉、御面会ニ
被相成候ハハよろしく
御一声奉希候、小生も
近来画ニ執心有之
候へ共、誰トテ師トス可キ
者も無之、京都ニ在ル
節蘊山へ画法ヲ問ハサルヲ
今更臍ヲ嚙ミソロ也

◇年代の比定は消印による。「昔日京洛能州辺」とは、明治一一年の京都聖護院時代、もしくは明治一〇年の京都聖護院時代、もしくは明治一一年の能登七尾で子弟二人で撮った写真のことか。「中川有行院」は叔父周順のことか。『草場船山日記』明治二年一月六日条によると、有行院は草場船山の馬路来訪の折にも同道している（荒木見悟監修三好嘉子校註『草場船山日記』文献出版、一九九七年）。

一二四八九

明治一五年七月七日

〔封筒表〕東京赤坂区台町十一番地

高田政久殿方

中川小十郎様

田上綽俊　至急拝復

〔封筒裏〕封　長崎県下小城郡多久町

〔消印　肥前小城別府八・一九〕

毎度御郵信被下候処
時々御回答も不仕失敬
御宥恕是祈最早
炎暑之候ニ相赴候。愈
御清穆御勤学之段
不堪逢喜候。拙無異
於郷校授業相整候間
左様御無念可被下候。
扨当春御書中へ御写真
御授贈被下候ニ付、拙吟
相認丹波迄差上其、末
御手下へ相達候様郵便へ
相托候処如何之間違歟
御郷里へも相達不申候由
失敬、貴兄ニも彌ヶ上之失敬ニ
相成申候、当春以来ハ
些と御病気之由ニて
病院へ御入院之趣及
御通知候故如何之御容子
ヤラ遥ニ心配致居候処
豈図今日ハ郵受又々
貴翰ヲ達ス、忙月披見
仕候処最早御快復之由
誠以欣喜之至奉存候。
旅中之病況ハ僕か
多年所経験騒瞼御困リ加之
身体強壮ナラサレバ勉強モ
出来不申、乍此上猶又
御保養可被成候。兼て
申上置候通都下ニ出候てハ
軽薄之風習ニ陥リ易ク
多少之金ヲ費シ終ニハ
無用之人物と相成候者
往々有之候間兎角善友と
交接切磋之工夫第一
と存候、亦是老婆心
也。何レ後便万縷可申伸、
先々彼此貴答まて
草略不悪頓首
七月七日　田上綽俊
中川小十郎様

尚以先般中川光輪より
一書手ニ落候。同人も
東京を離レ当秋迄
歟野州と歟ニ被参
候由、万一御面逢も
御坐候ハヽ宜敷御
伝語可被下候。
貴叔健次郎君
ハ近来何之方へ歟
御奉職と存候。此亦
宜敷御致声
奉憑候也。

◇田上の住所が長崎とあり、小城郡の佐賀県復帰の明治一六年五月以前のもの。「当春御書中御写真（中略）拙吟相認丹波迄差上」とあり明治一五年三月付書翰（一二四八六）の続報と思われる。

一二五〇五－④

明治一六年
〔封筒表〕東京赤坂台町十一番地高田殿方
中川小十郎殿　至急要
〔消印　東京一六・一・二〇〕
〔付箋　送達返〕
〔封筒裏〕封　長崎県下小城郡多久村

田上綽俊
〔消印　肥前小城多久一・一■〕

◇年代比定は消印による。付箋送違返は料金不足のことか。

二一五二九
（明治一七年）二月一七日
〔封筒なし〕
御尊母様御事御病気之未御養生不被相叶御死去之段御郵報被下驚嘆、何慮日夜御衰傷御同意奉存候、併シ御生前ニ御帰省ニて御看護相成御医者様ニも御遺憾無御坐御事坎と奉想像候、此段為御弔詞如此御坐候、頓首
二月十七日　田上綽俊
中川小十郎様　硯北
追て御再遊如何と懸念仕候也

◇年代の比定は養母みき（美幾）の死去（明治一七年二月三日）による。武平太あて悔やみ状（二一五二八）と同封か。この時の帰省が小十郎の進路に大きな影響を与えたと思われる。

一二五〇四
（明治一七年）六月二八日
〔ハガキ表〕京都府下丹波国
南桑田郡馬路村
中川小十郎殿　侍史
佐賀県小城郡多久村
田上綽俊
〔消印　肥前小城多久六・二九〕
〔消印　丹波南桑田馬路七・四〕
〔ハガキ裏〕
尓来御疎闊近況如何動静
清寒則幸甚、拙無恙不煩
尊念候。御不幸後如何御文通
無御坐、御東上ニモ相成候歟とも
存候へ共、卒度時候御伺申上候也
六月廿八日

◇消印はあるものの年代は欠けている。佐賀県あてであることから明治一六年五月以降であり、文中に「御不幸後」とあることから、養母みき没年の明治一七年と比定した。翌一八年に小十郎は在東京、実母さきの没年は明治二一年七月であり符合せず、ほかに小十郎が帰省すべき親族の「不幸」はない。この帰省は亡母の葬儀のほか、家督の相続や京都府師範学校の応請試験の受験などで長期にわたったようである（簿冊二二二六一）。帰郷後の九月に小十郎は東京専門学校を退学している。

一二四八五
明治一七年一二月一三日
〔封筒表〕東京小石川通音羽四丁目
二十四番地
中川謙次郎殿方
中川小十郎殿　平安信拝答
〔消印　肥前小城多久一二・一六〕
〔封筒裏〕封　佐賀県小城郡多久村

田上綽俊

〔消印　東京一七・一二・二四〕

尓来御無音ニ打過失敬
仕居候処頃日ハ御通信ニ
預リ慙喜感至最早
雪寒相成愈御清適
御勉学不堪欣然候。拙
依旧瓦全御憐察可被下候
当年ハ該地辺度々之
風災水害等ニて五穀
不熟民間大致困却候
情況可想候は新聞紙上
ニも埼玉県下竹槍蓆旗
之賊一時致騒擾最早
鎮定候趣ニハ候へ共何レ之
地方モ困難之惨状別
再考候。愚息芳太郎義
唯今芝区東佐久間町
一丁目一番地清水辰之介
宅寓居罷在候ニ付御暇日ニハ
御尋被下度、左スレハ近頃、
郷人数名東上ニ付拙之
近況も相分リ可申候、先般
御尊父様へハ拙翰差上
置候へ共尓今御回答無
御坐候。定て御平安と致逢
想居候。日外能州七尾
藤野より郵書手ニ入候故
答書差遣置候へ共其後
為何事も無之、彼人も西京
辺暫時被致遊歴候由
御坐候。中川光輪師ニハ御面逢
如何万一御出逢ヒ候ハヽ絵
画抔定て進歩ナラント御伝声
可被下候、此段時候御窺
旁草々不乙。頓首

十二月十三日　田上綽俊

中川小十郎様　梧右

尚以叔父様と近来
御面寓之由御同人へ
絶て御通信不仕御序
宜御致声可被下候。

◇年代の比定は消印による。文中の「埼玉県下竹槍蓆旗之賊」とは秩父事件（明治一七年一〇月）のことか。田上は民権思潮とは一線を画していたようであるが、「度々之風災水害」を体験した佐賀の様相から、「何レ之地方モ困難」な状況に対して同情の所感を述べている。文中の「七尾藤野」氏は不明、「光輪」氏は「叔父様」とあり実父禄左衛門の弟の周順（しゅうじゅん）（正圓庵住職、のち還俗して花山神社社掌）と思われる。

一二四八八

明治一九年一月二日

〔封筒表〕東京小石川表町五十二中川謙次郎殿方

中川小十郎殿　至急要用

〔消印　肥前小城多久一・二二〕

〔封筒裏〕封　佐賀県小城郡多久村

田上綽俊

〔消印　東京一九・一・二八〕

謹賀新年
愈御清適可被成御超歳
珍重奉逢祝候。老生無事
加馬齢候間御放念可被下候。
右年甫為御祝詞如此御坐候。

恐惶謹白
　一月二日　田上綽俊
中川小十郎様　硯北
再伸尓後契闊打過失敬仕候
愚息より之書状ニテ承リ候得は
旧冬ハ御大病ニ被罹甚タ御苦悩
相成御尊父様方迄御上京ニて
御看護被成候程之御事、併シ其後漸々
御快方ニ相成候由大慶之至ニ奉存候。
此寒気猶又御自愛不及申上候。
今般朝廷一大変革之趣何れ
民権拡張之端緒と愚考仕候。
尤此大地震ニてハ鯰公失望之
向も可有之今後之景況御報知
被下度奉希候。丹波之方へハ一封
差上置申候。草々不乙

　尚以謙次郎君へも宜敷
　御致声可被下候

◇年代の比定は消印による。「今般朝廷一大変革」「大地震」とは内閣制度開始（明治一八年一二月）のこと。「旧冬ハ御大病」とあるが、小十郎は明治一八年に大病を患い、実父・養父ともども上京するなど余程の大きなできごとであったようである（武平太書翰「るす中見舞おぼへ」二一五二三・二一〇一三）。この病気は小十郎の遊学が長引いた理由のひとつと思われる。

一二四八七

明治一九年四月一九日
〔封筒表〕■(東)京小石川区表町五十二番地
　中川謙次郎殿方
　　中川小十郎様　拝復急
〔封筒裏〕封　佐賀県小城郡多久村
　　田上綽俊
　〔消印　肥前小城多久四・二〇〕
　〔消印　東京十九・三・二五〕

和風暖日之好気候ニ
御坐候処愈御重適
可被成御勉学欣喜
之至奉存候。拙無異
送二光候間不煩高念
候。扨頃日ハ辱恵書
御厚志之段感佩
仕候、政府之地震も稍
致平定候由幸不幸
之喜悲可想像事
共ニ御坐候。中川光輪
師へ御面逢同師も折角
画学研究之趣
久振華論致一
覧候処実ニ割目
之至御坐候。就実物
師之申旨、意古之
応挙とも可申歟
妙ニ又も御面会候ハヽ
此段宜敷御通知
可被下候。御尊父様よりハ
近々御通信被下先達
て御亡母様之碑文
相撰呉候様御申越
ニ付乍不及拙文相綴
差上置申候。当地之景況
申上候程之事件も無之
何レ後便可細叙先々
為貴答草卒不乙頓首
　四月十九日　田上綽俊

中川小十郎様　硯北

◇年代は消印による。武平太宛墓誌撰文依頼状も数通残されている（二一五三一など）。美幾は戸長の武平太夫人として、丹波時代の田上の日常生活の世話をするなど細やかに生活の面倒を見ていたようである。

一二四九一

明治一九年七月二一日

〔封筒表〕東京麹町区一番町拾五番地中川謙次郎殿　中川小十郎殿　拝復急

〔消印　東京一九・七・二八〕

〔封筒裏〕封　佐賀県小城郡多久村　田上綽俊

〔消印　肥前小城多久七・二二〕

久敷不呈郵書候処忽得
算翰喜悚感至、大暑之節
相成候処愈御清適被成
御勤学奉逢拝候。野生
瓦全為章句師御憐察可被下候、
却説如貴諭尊太人之来命
ニ任セ御先妣様之碑文相撰
差上置候ヘハ、書亦相認呉候様
御申越相成候ニ付、何も乍恐拙
可応御索、近々相認可差上候。
先般政府御改革ニ付学則
亦一変ノ由固不足惶、乍併
如教科書毎々変換有之候てハ
貧民之子弟困却不尠候情状
可想矣、愚息芳太郎も此ノ
暑中休暇両度帰省致ス筈
ニ御坐候。其節ハ御近況も委ク
可承相楽居申候。同人再上ノ節
当地之情境亦可細述、先々
貴答御伺旁草々如此御坐候。頓首
七月廿一日　田上綽俊
中川小十郎様　机下

◇年代の比定は消印による。「政府御改革ニ付学則亦一変」とあるのは、明治一九年四月に小学校令・中学校令が、五月には教科用図書検定条例が公布されたことを示している。

一二四八〇〔参考・中川小十郎宛田上致俊書翰〕

明治一九年九月二五日

〔封筒表〕麹町壱番町拾五番地　中川小十郎殿　別紙在中

〔封筒裏〕芝桜田本郷町九番地田村方より　田上致俊

〔消印　東京芝口一九・九・二五〕

■〔時カ〕下秋冷之候愈
■〔御カ〕清適御勉学之段
奉欣賀候。扨迂生儀
去ル五日着京仕候。
実ハ不取敢御報知
■〔可カ〕申上筈之処彼是
■〔紛カ〕紛レ遅延及今日
■懶之罪何卒
■海容是祈
■参殿御伺可仕合ニ
候得共先以御報道
■上候。頓首
九月廿五日　田上拝
中川様　台下

尚以愚父より別封
被差上候間御受
取可被下候也

◇年代の比定は消印による。致俊は綽俊の子、幼名芳太郎。明治一五年京都をへて上京（二一四三一）、翌年、明治法律学校（現明治大学）に入学（二一四七八）。明治一九年に一旦帰郷して結婚・改名し（二一五二二）、再度上京して復学、一女をもうける（二一五二四）。卒業後は郷里へ帰り、明治二四年に長崎県吏員となる（二一四九五）。明治二六年には田上の訃報を馬路の人びとに届けるなど中川家との交流をつづけた（二一五二七・二一五三二）。■は切損。

一二四八一

明治二〇年一月二八日
〔封筒表〕東京本郷区駒込西片町十番地
中川謙次郎殿方
中川小十郎殿　親展急
〔封筒裏〕佐賀県小城郡多久村
田上綽俊

〔東京二〇・二・四〕

年始ニハ早速御祝詞被下
難有拝受、此方よりハ甚及
遅援（ママ）陰暦を以謹賀新年
申候、愈御清穆可被成御超歳
奉逢祝候。野生無異加年
候条左様御休神可被下候。
扨当時之形勢等御意見之
次第詳細御報道被下議論
卓絶読書之功自著于
章端、実ニ感心之至ニ御坐候。
竊ニ今日之景況ヲ考フルニ
如来諭虚飾外粧而已ニて
物毎ニ着実之模様無之
万一辺海有事防禦
之術其奈之何と不堪
杞憂候。新聞上計リニてハ
実際之事相分不申輿論
之所帰追々ニ御報知被下度
奉希候、何レ後便万縷可
申上先々貴答旁不罄頓首
一月廿八日　田上綽俊
中川小十郎様

尚以光輪氏御出逢ひ之節
よろしく

◇年代の比定は消印による。このころ小十郎は大学予備門に通っていた。また「万一辺海有事防御示之術其奈之何」と憂慮しているのは、明治一九年のノルマントン号事件、あるいは長崎事件をうけてのことか。

一二四九二

明治二一年八月一一日
〔封筒表〕東京本郷区駒込西片町十番地
中川謙二郎殿方
中川小十郎殿　至急緊用
〔消印　肥前小城多久八・一二〕
〔封筒裏〕封　八月十一日投函
佐賀県小城郡多久村
田上綽俊
〔消印　東京二一・八・一七〕

尓来契闊失敬之罪無
言可謝、何卒御高恕是祈
■（かの）遊難凌御坐候処愈御清適
■（可）被成御研栄奉逢拝候。

野生瓦全消光候間、左様
御承知可被下候。却説先達て
御尊父様より御郵書致頂戴
驚入候次第ハ、御実母様御事
■病気之末御養生不被相叶
御死去相成候由嘸々御愁嘆
可被成御坐、御回意奉存候。
御病中より為御看護度々
御帰省ニも相成候趣、遠路御
■（往カ）復之甲斐無御坐御、残念
被思召ハ御尤ニ候へ共、天命之
所件然其奈之何、乍返復
御弔詞申上候、〇今一ツ御申訳
無之次第ハ、当春御郵書
被下、大日本教育会雑誌
「」御恵贈之処、其頃ハ何歟之事ニ
取紛御礼答之書状不差上
処より是迄大延引と相成
平素之幾誼ニ相負キ候次第
今更後悔嗟臍申候、雑誌
■之御論説も記載有之、追々
熟覧仕候処、議論の高尚
條理之明晰ナル多年御勤学
之成績と実ニ感心仕候、
申上度事件も許多有之
■（候）■（共カ）■右二件余リ御無沙汰
ニ付老筆ヲ走セ謝罪旁
為可得芳慮草々不罄頓首
八月十一日　田上綽俊
中川小十郎様　梧右

◇年代の比定は消印による。小十郎の実母さきは明治二一年七月一二日没。「当春御郵書」の『大日本教育会雑誌』は明治二一年三月・四月号に正木政吉と連名で出した論考「男女ノ文体ヲ一ニスル方法」のことと思われる。
■は切損。

一二四九〇

明治二二年一月二日
〔封筒表〕東京本郷区駒込西片町十番地
中川謙次■（部カ、切損）■
中川小十郎殿　親展至急
〔消印　肥前多久廿二年一月三日〕
〔封筒裏〕封　佐賀県小城郡多久村

田上綽俊
〔消印　東京廿二年一月十日〕
謹賀新年
愈御重適可被成御超歳
欣喜之至奉存候。小生無恙
加馬齢候間乍憚御休神
可被下候、扨客歳度々御郵書
被下、殊大日本教育会雑誌
御恵贈被下候処、御礼之一封も
差上不申欠礼之罪無言
以可謝、併御蔭ヲ以時々拝覧
教育之方法與論之所在
致熟知件頑先頗有所開
発、亦是君之賜銘肝、
何日忘之老慨之義ハ何卒
御高恕可被下候、四方之党派
者備待兼居候国会も纔
隔一歳候に付てハ皇国之
形勢も亦可一変、来春ハ
余輩上京会議之傍聴
なり共致シ度、只今より予算
候へ共言来年之事為鬼所揶
揄、其奈之何余付、後便

先々年始御祝詞為可申上
如此御坐候。謹言頓首
　一月二日　田上綽俊
中川小十郎様　硯北

◇年代の比定は消印による。小十郎から郵送された『大日本教育会雑誌』の号数は不明。国会の開設も一年後となるなかで、「春ハ余輩上京」などと上京の希望を述べている。

一二四九三

明治二三年一月二日
（封筒表）東京本郷区駒込西片町拾番地
　中川謙次郎殿方
　中川小十郎様　平安信
（封筒裏）封　佐賀県下小城郡多久邨
　田上綽俊
〔消印　武蔵東京廿三年一月八日〕

謹賀新年、愈御重適
可被成御超歳雀躍之
至ニ奉存候、野生無事
深馬齢候間、乍憚御
承知可被下候、右年甫
之御祝辞為可申候陳
如此御坐候、当期永陽
之時候、恐々謹言
　一月二日　田上綽俊
中川小十郎様
再伸、昨度以来無限
御無沙汰仕、実ニ御申訳
次第御坐候、彼ノ御北遊
之節ハ御紀行抔委敷
御報道被下、余ガ先年
奥羽平定後直ニ出羽酒田へ
民政局建設相成、同局
暫時之間奉職、鶴岡・
大山辺ハ殊ニ存知之場所ニて
右御経歴ニ相成候由御記載
ニ付、雪泥鴻爪廿年余ト
愈起懐旧之情申候、
如此情懐も有之、早速御答
可申述候処、其頃色々之事
故ニ取紛、尋喪老母、彼此
ノ訳ヲ以終至於今日申候、
兼て疎懶之上、右之情実
不悪思召奉希候、さて
本年ハ人民年来所希望
之国会開設ノ時期ニ至リ
東京辺人気如何と想像
致シ候、昨年来吾多久村
地方党派等敷事流行、
是亦世間之風潮無余義
次第とハ存候へ共、鎖細之事
まて影響ヲ及シ、動輒私
怨ヲ結ブ様之事ナキニシモ非ズ、
是吾輩老人之尤所嘆息、
改進・大同抔之主義、何卒其内
委敷御報道奉希候、先達て
賦一首其中一聯
　国会開時多政党文
　明盛処唱民権
先々此ニて閣筆頓首

◇年代の比定は消印による。小十郎の「北遊之節」とは大学予備門を修了した二二年の夏、大日本教育会の社員として「各地教育の景況その他」の調査をおこなったことをさしている（中川家史料二二二六一の簿冊のうち）、また田上が戊辰の東北戦争従軍を回顧する一

文もあり、山陰道に従軍した馬路の人々との共感を伝える史料でもある。

一二四八三

明治二三年二月二一日

〔封筒表〕東京小石川区指ヶ谷町蓮■（華士カ）
中川小十郎殿親展　至急

〔消印　武蔵東京廿三年二月二十六日〕

〔封筒裏〕封　佐賀県小城郡多久村
田上綽俊

寸楮拝呈漸々春暖之候
相成候処愈御清適可被成
御起居奉逢拝候、野生無事
消光罷在候間不煩尊念候。
久年此方よりハ老慨ニて時ニ御回答も
不仕候処貴殿ニハ旧誼ヲ不忘
教育雑誌抔毎度御送付
被下御厚志之程奉銘肝候、御蔭ニ
教育上ニ係ル天下之輿論等
委細拝見余輩ノ如キ僻郷
之小学校教員亦大ニ裨益
スル所アル、是亦何等賜
教育ハ追年進歩致シ候へ共
別ニ不堪杞憂候所之者一ツ
アリ、政党是也、都府ハ始置
而已か、吾郷之辺僻迄漸々波及
無智之愚民ヲ煽動シ各自
之勢力ヲ得ント欲ス、其競争
未タ底止スル所ヲ知ラス恐クハ
此影響自然ト学校之生徒
ニ及ビ脩身書ノ講釈モ無用
之長談カト老婆心ニ堪
エズ、駁撃者必ズ曰ハン
雖生徒政治之思想ナキ
者ハ無用ノ学ナリ、党派ニ
関スルモ亦何妨之有ト、余以為
不然軽躁浮薄徒ニ弁
論ヲ好ム者ハ必ズ忠君徒愛
国ノ至情ヲ存セズ、今日ノ教
育家意ヲ此ニ用ヒバ堂々タル
政治者流自此中輩出
天下ノ太平期シテ待ツ可シト
頑固之僻説雖不免、活
眼者之咲陳述以請教
草々不罄頓首
二月廿一日　田上綽俊
中川小十郎様　梧右

◇年代の比定は消印による。田上の懸念する「政党の弊害」は「無智之愚民を扇動」するもので、それが「学校之生徒ニ及」ぶことを杞憂している。国会開設に理解をしめしながらも、民党（民権運動）に共感することのなかった田上の心象がよくあらわれている。

一二四八四

（明治二三年）四月九日

〔封筒なし〕

謹啓老慨之余郵書
不差上候処教育報知
続々御逓送被下誠ニ不忘
旧誼之御厚志奉感佩候。
且又此節ハ御翻訳相成候
実用経済学一篇御恵賜
不取敢拝読仕候処吾輩
固迂闊其主旨遽ニ難
了解候へ共字句明瞭学力
之造詣真可驚、多年在京

御勉励之功績於是平顕
矣、尊太人ニモ此書定て直ニ
御献呈嘸御喜悦と奉
想像候。貴社本月記念日
詩歌等之祝詞可差上御
通知被下候処、兼て拙作殊ニ
近来廃絶入電覧候詩ナト
出来兼候へ共、折角之貴諭
其侭難差置終表祝意
迄一首相構候ニ付差上候間
御咲吟被下度、左ニテ附録等ニ
御記載之義ハ決て御断申上候。
万一枯木も山賑ひ御記載
ニも相成候ハヽ御叱正之上可然
御取計之程奉希候。貴社長
日下三之介氏より御連名ニて預
書翰候へ共別段答書不相認
候ニ付御序宜敷御伝語奉
希候。此段御訳書被賜候御礼
旁草略不罄頓首
　四月九日　田上綽俊
中川小十郎様　文梧下

◇年代は「御翻訳相成実用経済学一篇御恵賜」とあり、『実用経済学』の刊行年による。「社長日下と連名の書翰」との記述もあり刊行直後のものであろう。同書はボーカー著・天野為之校閲・中川小十郎訳述で明治二三年一月に冨山房から刊行されている。

一二四八二

明治二四年一〇月一五日
〔封筒表〕東京帝国大学寄宿舎
　中川小十郎殿　奉答至急
〔消印　肥前多久廿四年十月十六日〕
〔封筒裏〕封　佐賀県小城郡多久村
　田上綽俊
〔消印　武蔵東京廿四年十月二十日〕

去ル十一日之御手書今十五日
落手拝誦仕候、最早秋冷
之候愈御全適可被成
御勉励奉逢拝候。さて
昨冬以来病気而已実ニ
困却罷在候。其概略ヲ説
シニ昨冬ハ流行感冒ニ係リ
当春ハ肝臓炎ノ篤疾
殆瀕死少々癒平外出等も
出来候処ニ盛夏頃より又々
神経痛ヲ患ヘ身体之
屈伸も不自由至、今日少シハ
快方共存候へ共猶就病床
居候老体、余生ヲ惜ムニハ
足ラズト雖トモ今一遍ハ全
快候テ開明進歩之模様
ナリトモ、傍観致シ度モノト
不怠服薬候間、御憐察
可被下候、貴兄ニハ帝国大学
ニ於テ近来政治学応用
経済学科御研究之由
吾輩之頑陋其学科
ノ味ハ存不申候へ共、終身之
目的ヲ立ルニハ勿欲速勿
視小利ノ孔子ノ訓意モ有之
兎角刻苦勉励其御志
ノ必ズ達シ候様希望仕
義ニ御坐候。是亦老婆心
ナリ。当春御消息被下候節ハ

丁度大患頃ニテ御著述
之一篇御恵贈ニ預リ候ヘ共
其御礼答も不仕失敬之段
乍延引謝罪仕義ニ御坐候。
馬路御尊父様之方へも病
ト懶トニテ御無音ノミ。併シ
先頃一遍郵書差上置
候、定テ御健康と奉存候。老者も
此病気衰弱共ニてハ今日
之形勢抔如何と論評ヲ下シ
難ク候へ共政党之勢益盛ル
今日又々如何之変動ヲ来ス
ヤモ難計ト不堪杞憂候間
天下ノ輿論或ハ御先見之次第
其内御報道被下候ハヽ無此上
仕合セ奉存候。余ハ後便万縷
可申上欠礼勝ニ付不取敢
草希如此御坐候。頓首
十月十五日　田上綽俊
中川小十郎様　硯下

近来ハ病中物案シモ障リ
詩作モ出来不申旧中秋
頃一首ノ腰折懸御目候
此ニテ病状御推察可被下候
いろつきし身は秋枯て
名にしおふ　月を見るにも
言の葉そなき

◇年代の比定は消印による。明治二二年九月、小十郎は帝国大学法科大学に進学している。明治二四年正月の南桑田郡長石田真平あて書翰では、咬菜舎を引き払い寄宿舎に移る旨を述べている（亀岡市文化資料館『第六一回企画展「中川小十郎」展示図録』、二〇一六年）。また若き日の小十郎の活躍をよく伝えるものである。

一二五〇五－①〔田上綽俊関係書翰・空封筒〕

（年不明）八月九日
〔封筒表〕京都府下丹波国南桑田郡馬路村
中川小十郎様
田上綽俊貴面為
〔封筒裏〕封　八月九日認

佐賀県小城郡多久

一一四九五

（年月不明）二二日
〔封筒表〕丹波桑田郡馬路邨
中川武平太様
田上綽俊　平安信
〔封筒裏〕封　證書添
昨日ハ御不快ニて午後より
御帰宿ニ相成、今日直リ之
御容子如何及御尋候、
草々不帰
廿二日　田上綽俊
中川小十郎様　梧右
塩魚ノ進呈被供晩餐
則幸甚

◇武平太宛書翰に同封、京都遊学時のものか。

【参考資料　七尾市渡邊齊氏所蔵史料】中川小十郎の七尾時代の回想

少年時代の中川小十郎が田上綽俊とともに過ごした日々のなかで、能登七尾（現石川県七尾市）への旅路や半年の下宿暮らしは最も印象に残る体験であった[一]。本稿では田上の能登在勤中の武平太宛書翰数点の所在を紹介した。

当時小十郎たちの友人のひとりであった渡邉よね（よね子）の子孫である渡邊齋氏のお宅に小十郎や立命館大学からの書翰一九点（はがき含・封筒別）が残されていた。書翰は開封後、封筒と別置されており、発信の年代は特定できないものが多いが、台湾銀行退任前・関東大震災被災後の大正末年から昭和初年のものである。

小十郎は、よねの息子の伊夫が何かの縁で彼のもとを訪れたことを機に旧交を温めたようである。よねの上京を促し、「東山」作の菓子器の盃を贈るなど、家族をふくめての交遊は継続されていた。

本稿では、田上家から提供された少年時代の小十郎と田上の写真[二]をもとに、往時を回想した書翰を紹介する。

〔渡邉よね宛中川小十郎書翰〕

（年不明）五月二六日

拝啓

此度は令息伊夫殿

拙宅御訪問下サレ有リ

難ク存ジ候、承ハリ候ヘバ

今日迄何カト御心労セラレ

シ御事ト存ジ候モ、先々御壮

健ノ御由大慶ノ至ニ存シ候、

御写真拝見致シ候、何分

四十余年前ノコトナレバ今日

之ヲ拝見シテモ一寸分リカヌ

ル位ニ有之候、併シ面長

ニシテ背高キ方ナリシコトハ今

ニ記憶致シ居リ候、丁度

田上先生ノ御供ニテ幼少ノ

頃写シ取リ候写真ガ

田上先生子息ノ方ノ宅ニ

アルコトヲ知リ之レヲ復写セ

シモノ一葉御覧ニ入レ申候、

小生ガ御地方ヘ参リシハ十三

四才ノ頃ナレバ、此写真ハ其

二三年モ前カ、一二年前

ノモノカト存候、之レヲ御覧下

サレ候ハバ、多分当時ノ御

記憶ヲ喚ヒ起シ下サレ候

コトト存候、昨年十一月ニ

写シ候モノ一葉相添ヘ

カシ候、并ベテ御覧下サレ候、

同じ同一人ト相見ヘ申ス

ベキカ如何ニ候ヤ

当時ハ子供ノコトトテ色々

御厄介ニ相成候コトト存ジ

ナガラ今日ニ及ビ候次第ナルニ

御近情モ承知致シ、又御

地方ノ模様等伊夫殿ノ

御話ヲ聞キ懐旧ノ情ニ

堪ヘザル次第ニ御座候、舟木

甚右衛門氏近傍ニ住
居セシ医師某モ已ニ物故
セラレシ由、四十余年前ノ
コトナレバ是亦当然ノコトト
存ジ候モ、御同様今日アルハ
仕合ト思ハネバナラヌト存候、
承ハリ候ヘバ耳ノ疾患
有之御難義ノ由ナルガ、一
度御上京御養生相成候テハ
如何ニ候ヤ、小生知合ノ者
ニモ耳鼻科ノ大家
モ有之申候、自然其ノ
折ニハ昔年ノコトナド御話
相伺ヒ候コトモ出来申スベシト
存シ候、是非御上京御勧
メ申シ上候、
別ニ相添へ申候品々有
合セノ品ニ候モ進上致シ度候、
御入手ニサレ度候、草々
　五月廿六日　中川小十郎
渡邉よね子殿　御許

（一）横川敬雄「中川小十郎と七尾の女性」（『七尾の地方史』第二三号、一九八九年）。
（二）中川小十郎「私の発見を発見する」（『立命館禁衛隊』第一五号）所載の写真（四四六四三）。



中川小十郎（左）と田上綽俊（右）

「中川家史料」田上綽俊書翰一覧表

・年代比定は凡例一に従った。
・史料紹介をした中川小十郎宛書翰には通番号後に※印を付している。

通番号		和暦	月日	題	内容・備考
21499		明治 10	2 月 14 日	〔紛失物返還入手の礼状〕	※明治 9 年 12 月盗難届（21417）
21482		（明治 10）	8 月 1 日	〔京都への転居〕	「今暫滞京之積・・好寓居相求・・聖護院辺へ一寓居確定」
21487		（明治 10）	8 月 10 日	〔聖護院転宅、遊学勧誘〕	「漸寓居相定少々田舎ニ候得共閑静の土地読書ニハ最上」「御令息様萬一御遊学の御心得ニ御座候ハハ成丈御世話可仕」
21483	※	（明治 10）	9 月 19 日	〔鶏卵礼状、八橋送付〕	
21481		明治 10	10 月 3 日	〔私塾開講案内、新聞送付〕	「少子不相当砰々滞京」「西南之一件も最早鎮定之由」
21503		（明治 10）	10 月 15 日	〔小十郎と精一郎の京都遊学勧誘〕	封筒（消印なし）「小十郎様ハ精一郎一同御出遊有之」
21517		明治 10	12 月 8 日	〔小十郎着京、入塾報知〕	「令息様へハ御勉強相成候様追々説諭」
21505		（明治 11）	1 月 10 日	〔招宴の礼状〕	「当節ハ多人数参上・・草場氏（船山）も始て御地経歴」※『草場船山日記』
21440		（明治 11）	2 月 9 日	〔京都遊学中の小十郎病状〕	封筒なし「御風邪之気味ニて面部或ハ手足間ニ小粒之出来物」（麻疹カ）
21493		（明治 11）	2 月 13 日	〔綽俊宅訪問と謝儀の礼〕	「御賢息様ニハ其此頃はお風邪之処唯今御全快」
21506		（明治 11）	2 月 22 日	〔馬路の人への貸金返済督促依頼〕	※罫紙 3 枚
21427		（明治 11）	2 月（26 日）	〔能登出立の見送りの礼状〕	「代舌」「弊寓御幸臨」※（21438）2 月 26 日付田上宛武平太書簡（能登出立の見送り）と同封
21510		（明治 11）	2 月 28 日	〔借金償却、能登行の報告〕	「能州行ニ付て御賢息様方之御処置ハ定て賢兄君と最早御相談」
21513		明治 11	3 月 15 日	〔能登への見送りの礼状〕	武平太ほか 7 人あて「金沢より一泊シテ七尾駅へ三人共別て壮健無事参着」

21512		明治 11	4 月 12 日	〔能登紀行中ノ抜粋〕	武平太ほか 4 人あて　朱書「四月十六日午前八時着」「紀行中の抜粋　明治 11 年 3 月 6 日・7 日」※便箋表裏・下部一部焼損
21508		（明治 11）	8 月 15 日	〔能登からの帰京予定報知〕	「半季ノ期限最早差迫リ一昨十三日交換願差出」「御令息様此暑中も無御障御勉学」
21464		明治 11	10 月 5 日	〔能登帰京後の住所〕	封筒なし「京都小教校在勤被申付」「東洞院五条下ル三丁目松井まきと申者ノ借宅ヲ借受」
21501		（明治 11）	11 月 4 日	〔小十郎就学継続の依頼状〕	封筒なし「御賢息様御就学ニ付禄左衛門様被為付托御懇命」
21500	※	（明治 11）	11 月 10 日	受領証	受取証（月謝 2 円 12 銭）
21507		（明治 11）	12 月 2 日	〔寒中見舞い、蒲団など差し入れ礼状〕	「掻餅ハ御賢息様毎夜御勉学之節中（中略）雪ヲ噛ムノ音ヲ為セ相楽ミ」
21484		（明治 11）	12 月 14 日	〔能登帰京後の小十郎学業〕	「御帰国後御賢息様ニも夜白御勉励」
21509		（明治 11）	12 月 22 日	〔黒豆など送付礼状〕	「御賢息様ハ不相変御勉強ニ付御安慮」「春雄氏自薩摩帰還」※馬路の医師の中川春雄は西南戦争に従軍
21491		（明治 11）	12 月 30 日	〔草場船山らと馬路訪問報知〕	「来ル一月ニハ草場ヤラ有行院同道ニ而罷出候」「小十郎様御勉学御安心」
21494		（明治 12）	1 月 19 日	〔礼状、塾生の紹介依頼〕	「今日ハ幸ひ草場来訪ニ付一鍋割烹共賞味添観雪之興」「御賢息様夜日御研究」※参考『船山日記』1 月 19 日
21514		（明治 12）	2 月 16 日	〔書簡の返信〕	封筒・消印なし「致遠館之拙心ハ大ニ愧入候」「御賢息様不相変御勉強」
21511		（明治 12）	2 月 19 日	〔揮毫の詫び状〕	「当節当管内副区長被相変候由」※明治 11 年 7 月　郡区町村編成法
21516		（明治 12）	3 月 1 日	〔伊勢参宮発足の報知〕	「伊勢参宮之義最早春暖ニ付本月四日より発足」
21488		（明治 12）	3 月 14 日	〔伊勢参宮帰京の報告〕	「無滞参宮往来共別而無難、昨日午後六時前帰京」
21502		（明治 12）	4 月 11 日	〔堀ノ内見舞い状〕	封筒なし「小十郎様就中御壮健日夜御勉励」

21492		（明治 12）	4 月 16 日	〔鶏卵など送付の礼状〕	「托飛脚　菓子添」「鶏卵たんと頂戴御蔭テ朝夕補薬相用可申候」（田上は病気カ）※ 10 年 4 月は在馬路、11 年 4 月は在能登
21490		（明治 12）	4 月 22 日	〔小十郎学費受領通知〕	封筒あり・消印なし、金 5 円「今般郡区改正（明治 11.7）ニ付村総代御勤之由」
21489		（明治 12）	4 月 28 日	〔登京の折面談依頼挨拶状〕	「両度御上京之趣致承知候」
21485		（明治 12）	5 月 4 日	〔郷里へ赴任につき塾生帰郷〕	「久留米小教校派出（中略）一遍帰省之心持」「折角御勉学中御中絶等無之様御処（中略）帰省之支度も御坐候故発足ハ来ル十五日後」
12505 －⑤	※	（明治 12）	8 月 14 日	封筒	封筒裏書「丹波国桑田郡馬路村投函」
21547		（明治 12）	9 月 19 日	〔小十郎の東遊の祝辞〕	「九月廿八日着」「御賢息様より謙次郎氏と御同道ニて共に東京御出発之御報知」
21486		（明治 12）	10 月 6 日	〔田上の退校挨拶、流行病見舞い〕	「新入之教員先生も病気」「虎狼痢（コロリ）病流行之節」
21542		（明治 12）	10 月 14 日	〔帰郷と郷里中学校勤報知〕	前欠、別啓に岩老人（中川重賢・小十郎祖父）物故の悔やみ　※中川岩　12.8.7. 没（『中川岩君略伝』44435）
12505 －⑥	※	（明治 12）	10 月 17 日	封筒	消印「筑後三潴久留米一〇・一七」※田上の帰郷途上の郵便
21546		（明治 12）	12 月 7 日	〔久留米祭礼など景況〕	「先月十六日より三日間旧藩祖新宮へ為祝祭」※同封別紙在中
21541		（明治 12）		〔小十郎東京府第一中学校入校祝辞〕	「御賢息様ニハ東京府第一中学校御受検之上及第‥直ニ御入校之由」※ 21541 ～ 21544 同封
21540		（明治 13）	1 月 2 日	〔新年賀詞、久留米より多久へ帰郷〕	武平太ほか 5 名あて「昨十二月廿五日より久留米全ク辞職致シ直ニ帰郷」「此一月より郷里中学校ヨリ是非共教授致シ呉候様及懇望」
12505 －③	※	明治 13	3 月 14 日	封筒	「肥前杵築北方三・一四」「東京一三・三・■」
21504		（明治 13）	4 月 5 日	〔帰郷後の学事や地方景況〕	武平太ら 4 人あて「地租改正ハ当春ヨリ」「暴動後人心鎮静之模様」
21543		（明治 14）	1 月 27 日	〔養蚕の種紙注文〕	池尻村の種紙（産卵紙）
21535		（明治 14）	3 月 12 日	〔蚕紙送付の礼など〕	「大平山境界之事件未タ判然無之」「御令息様よりハ東京より御音問被下御盛御勉強之由」

21544		（明治 14）	6 月 3 日	〔養蚕、塾生へ伝言依頼〕	「御賢息様へ差上候牘も包込加之精一郎家内への書状も一同入置」
21538		（明治 14）	7 月 7 日	〔蚕種代価支払い、長崎県下学事状況〕	「中学校ハ私立モ御願ニ依テ処ニ県立ト相成候由、僕ノ近況ハ毎日上校・変則ノ課業ヲ授ケ、家ニ帰レハ校生十名許来テ、孟子・左伝ノ講ヲ聴キ、素読生徒亦来ル、寄宿生モ両三人有之」
21539		（明治 14）	8 月 4 日	〔暑中見舞い、蚕種礼状、長崎県下学事の景況〕	「京都府知事（槙村正直カ）ハ転任ト新聞上相見」「国会論各地奮奮起ノ趣」※ 21538 同封
21536		（明治 14）	12 月 6 日	〔時候伺い、蚕種買入れ依頼、県下社会や学事景況〕	「当秋以来旱魃ニ而殊之外農民之難渋」「該地中学事件ニ付今日迄建築之地所潰害」「貴息様・・近来ハ洋学ニ御転学之由」
21537		（明治 14）	（12 月）	〔カキ餅の製法について〕	「追申」※ 21536 の便箋切れ使用、※ 21536 同封
21545		（明治 14）	—	封筒	「■■別府一〇・三一」「丹波桑田亀岡二・七」※「別府」の消印明治 14 カ .12.4（21576）
21428		（明治 15）	1 月 2 日	〔旧暦で新年賀詞、県下学事景況〕	「昨年来中学一件ニ付彼是生紛議無余儀致関係会議ヂャノナンジャノと混雑中、今般中島文部権大書記官学事為巡視当県下下向」
21433	※	明治 15	1 月 3 日	〔新年賀詞、小十郎へ学習激励〕	「東京一五・二・二」「御勉強最早成功之機も相見へ候義と存候、兎角物毎ニ実着ヲ主眼トシテ御勉強有之度」
21429	※	明治 15	1 月 5 日	〔新年賀詞、近況報知〕	「東京一五・一・二四」「帰郷後変則中学へ出勤、其他ハ家内へ寄宿生も有之、家事其外多忙而已」
12505 －②	※	（明治 15）	2 月 12 日	封筒	「肥前杵築北方二・一二」「東京■・二・■」（切損のため判読不能）※小十郎住所
12486	※	明治 15	3 月 13 日	〔写真送付礼状、画法習得のことなど〕	「東京一五・三・二五」「昔日京洛能州辺ニて撮影」（京都または能登時代の写真カ）
21473		（明治 15）	3 月 13 日	〔新年賀詞の礼状、小十郎より写真送付のこと〕	「貴息小十郎君之書（中略）君之一写真」「中学校ハ一昨年来小城ト葛藤ノ末殆為変頽、乍併有志之徒協議ヲ以漸再興」

12489	※	（明治 15）	7 月 7 日	〔小十郎の入院見舞い、旅中生活心得など〕	「拙無異於郷校授業相整」「都下ニ出候てハ軽薄之風習ニ陥リ易（中略）終ニハ無用之人物と相成候者往々有之」※ 12486 の続報・写真を丹波へも送付
21533		明治 16	1 月 2 日	〔新年賀詞〕	中川佐一郎ほか 16 人に回覧※ 21534 と同封
21534		明治 16	1 月 2 日	〔大平山一件尽力の慰労、九州巡遊勧誘〕	※ 21533 と同封
12505 －④	※	明治 16	1 月	封筒	付箋「送違返　東京一六・一・二〇」消印「肥前小城多久一・一■」「東京一六・一・一九」
21431		（明治 16）	2 月 16 日	〔芳太郎（綽俊子息）東上の途次京都訪問報知〕	「西京船山ノ方卒度立寄筈」
21478		（明治 16）	4 月 19 日	〔芳太郎の東京遊学〕	包紙あり、「愚息芳太郎明治法律学校入学」「小十郎様へハ必ス御尋申上候様申付」
21548		（明治 16）	4 月 28 日	〔芳太郎の東京遊学、長崎県下景況〕	「芳太郎当節明治法律学校へ就学」※長崎県令内海忠勝から石田英吉へ　明治 16 年 3 月交代
21549		（明治 16）	9 月 28 日	〔秋の動静伺い、豊熟の景況〕	「当年ハ悪疫流行も無之稲作ハ勿論野菜ニ至ル迄豊熟」「御賢息様と近来御互ニ郵書往復打絶候」
21528		（明治 17）	2 月 17 日	〔武平太夫人悔やみ状〕	「小生御地留寓之節ハ爰切御厄害ニ相成候」※ 21529 同封　※みき明治 17 年 2 月 3 日没
21529	※	（明治 17）	2 月 17 日	〔小十郎継母悔やみ状〕	「追而御再遊如何と懸念仕候」※ 21528 同封
12504	※	（明治 17）	6 月 28 日	〔不幸による帰省後の東上伺い〕	はがき、養母みき葬儀カ
21469		（明治 17）	8 月 6 日	〔暑中見舞い、佐賀景況〕	「御家内之義ハ御不幸後定て御困却」「御賢息様よりハ先般東京より御郵書」「去ル三日ニハ雷雨烈敷市中一家懸‥梅雨中ニも一度洪水」）※ 21469 ～ 21550 紐括り
21472		（明治 17）	8 月 26 日	〔暑中見舞い、郷里で開塾〕	「先般御賢息様御帰省ニ付てハ四五年振り之御面会」「野生自帰県已歴五年（中略）当秋小屋ヲ造り塾ヲ開カンと熟考中」

21479		明治 17	10 月 17 日	〔小十郎予備門進学祝辞、佐賀景況〕	「大学予備門御入学相成候由御通知」
12485	※	明治 17	12 月 13 日	〔田上の近況、世情報知〕	「東京一七・一二・二四」「五穀不熟民間大致困却」「埼玉県下竹槍蒂旗之賊一時致騒擾最早鎮定候趣（秩父事件）」
21474		明治 18	1 月 11 日	〔新年賀詞礼状、外交政策所感〕	「外国之侮辱ヲ受ケテハ愛国之大義ニ背キ不堪憤懣」
12488	※	明治 19	1 月 2 日	〔新年賀詞、昨冬の小十郎病気見舞い〕	「東京一九・一・二八」「旧冬ハ御大病ニ被罹甚タ御苦悩相成御尊父様方迄御上京」「今般朝廷一大変革」※明治 18 年　内閣制度
21523		（明治 19）	1 月 2 日	〔小十郎病気見舞い〕	「御賢息様一時御大病ニ付禄左衛門君と御一同御上京相成」「近々御快復之趣御安心之御事」※ 21013　明治酉（18 年）11 月「るす中見舞おぼへ」
21531		（明治 19）	4 月 1 日	〔武平太夫人墓碑撰文案〕	※罫紙
12487	※	明治 19	4 月 19 日	〔田上近況、中川光輪と交流〕	「東京一九・四・二五」中川光輪（叔父の周順カ）と画論などの交流「政府之地震も稍致平定（内閣制についてカ）」「御亡母様碑文の撰文依頼」
21526		（明治 19）	7 月 8 日（旧暦）	〔武平太夫人碑文、息子結婚、佐賀景況〕	コレラ流行などを報知する「虎烈剌ハ雖吾郷四里東松浦郡相知駅迄侵入頗ル蔓延之勢有之」※明治 19 年コレラ流行
12491	※	明治 19	7 月 21 日	〔先妣碑文、近況伺い〕	「東京一九·七·二八」「学則亦一変ノ由（中略）教科書段々変換」「芳太郎（田上息）の帰郷」
21530		（明治 19）	7 月 23 日	〔墓碑撰文、佐賀景況〕	「虎烈剌如何弊村近傍未タ入込不申候へ共近郡まて段々と患者も有之候由、蔓延之模様相見候」
12480	※	明治 19	9 月 25 日	〔致俊（田上の子息）再上挨拶〕	「東京芝口十九・九・二五」※書簡上部切損
21522		（明治 20）	1 月 2 日	〔新年賀詞、致俊婚姻〕	「御令息様不相変東京之方ニて御勉強ニ在候」「愚息芳太郎去明八月暫帰、婚姻首尾能相整」
12481	※	明治 20	1 月 28 日	〔新年祝詞礼状、小十郎論文へ賛辞〕	「東京二〇·二·四」「議論卓絶読書之功自著于章端実ニ感心之至」（「いらつめ」原稿カ）「今日ノ景況（中略）万一辺海有事防御之術其奈」※ 19 年のノルマントン号事件

21550		（明治 20）	8 月 20 日	〔暑中見舞い〕	人見龍之進の東上を案じる
21477		明治 21	2 月 13 日	〔新年賀詞礼状〕	「御賢息様ハ不相変東京ニおいて御勉強之趣」※ 21475・21576 同封武平太より人見龍之進らへ回覧
21524		（明治 21）	7 月 31 日	〔暑中見舞い、世相動向〕	「豚児（子の致俊）も於東京一女子ヲ設ケ」「御賢息様より日外雑誌抔御郵送被下候」
21525		明治 21	8 月 1 日	〔禄左衛門夫人悔やみ状〕	「副啓」あり※小十郎実母さき　明治 21 年 7 月 1 日没
12492	※	明治 21	8 月 11 日	〔小十郎実母悔やみ、教育会雑誌送付礼状〕	「八月十一日投函」「東京二一・八・一七」「議論の高尚條理之明晰ナルノ両年御勉学之成績」
21521		明治 22	1 月 1 日	〔新年賀詞〕	「肥前多久明治廿二年一月三日」「丹波馬路廿二年一月八日」、人見龍之進ほか 11 人あて
12490	※	明治 22	1 月 2 日	〔新年祝詞、教育雑誌送付礼状〕	「肥前多久廿二年一月三日」「東京廿二年一月十日」、「春ハ余輩上京会議（国会）之傍聴なり共致シ度」
21518		明治 22	9 月 5 日	〔亡母弔辞と香典の礼状〕	「肥前佐賀多久廿二年九月六日」「丹波馬路廿二年九月十日」「御賢息様東北筋御遊歴後最早御帰京」
21519		明治 22	12 月 18 日	〔寒中見舞い、国会開設など世情所感〕	「肥前多久廿二年十二月十九日」「丹波馬路廿二年十二月二十三日」「御賢息様ハ於東京不相変御勉強」
21470		明治 23	1 月 1 日	〔新年賀詞、世相所感〕	「肥前多久廿三年一月二日」「丹波馬路廿三年一月六日」「昨年ハ・・大風・洪水・地震等之災害不一方人民之憂慮」「本年ハ数年来希望シタル所国会相開ケ候」
21471		明治 23	1 月 1 日	〔馬路の人へ新年賀詞〕	人見龍之進ら 8 人あて、※ 21470 と同封
12493	※	明治 23	1 月 2 日	〔新年賀詞、戊辰戦争従軍回想〕	「武蔵東京廿三年一月八日」「（小十郎の北遊にふれ）先年奥羽平定後直ニ出羽酒田へ民政局建設相成同局暫時之間奉職」「本年ハ人民年来所希望之国会開設」
12483	※	明治 23	2 月 21 日	〔教育雑誌送付礼状、政党の教育への影響を憂慮〕	「武蔵東京廿三年二月二十六日」（※切損のため判読不能）「不堪杞憂候所之者一ツアリ、政党是也」

12484	※	（明治 23）	4 月 9 日	〔翻訳書『実用経済学』送付礼状〕	「御翻訳相成候実用経済学一篇御恵賜」
10687		明治 23	5 月 13 日	〔東上した武平太へ窺い状〕	「丹波馬路廿三年五月十七日」「東京内国博覧会（中略）御上京」「（小十郎より）教育社主筆御勤務之趣」
10688		明治 23	7 月 31 日	〔暑中見舞〕	「肥前多久廿三年八月一日」「丹波馬路廿三年八月五日」「米価騰貴致シ候て貧民及饑餓候」「（小十郎より）教育雑誌不絶御恵贈」
12495		明治 24	9 月 6 日	〔病状、世情報知、小十郎より病気見舞いの返書〕	「定メテ御健康ニテ御勉強」「昨冬ハ初て之国会無事」「致俊当夏長崎県へ転任」
12482	※	明治 24	10 月 15 日	〔帝国大学進学祝詞、病状報知〕	「肥前多久廿四年十月十六日」「武蔵東京廿四年十月二十日」「（田上の）流行感冒・肝臓炎・神経痛」「帝国大学ニ於テ近来政治学応用経済学科御研究之由」
21520		明治 25	8 月 8 日	〔病気見舞いの礼状〕	「肥前多久廿五年八月■日」「丹波馬路廿五年八月十三日」「御賢息様（中略）此節之御書中ニ当地方御遊歴之思召」
21527		明治 26	5 月 22 日	〔田上綽俊死亡通知〕	致俊書簡（はがき）「肥前多久二六年五月二十二日」「丹波馬路廿六年五月二十四日」※綽俊忌日 26 年 5 月 11 日享年 61 才（『多久市史』人物編）
21532		明治 26	6 月 9 日	〔綽俊葬儀の弔詞、香奠礼状〕	致俊書簡「肥前多久廿六年六月九日」「丹波馬路廿六年六月十二日」「法号ハ湖南綽裕居士（中略）仏葬式ニテ多久村字尾越ト申先代ヨリノ墓地へ埋葬」
12505 －①	※	—	8 月 9 日	封筒	消印なし、裏書「八月九日認」
21425		—	1 月 5 日	〔菓子など恵贈の礼状〕	「口上」※馬路時代（明治 8 ～ 10）カ
21480		—	3 月 15 日	〔菓子の礼状〕	「代昏」※馬路時代カ
21495	※	—	22 日	〔不快見舞〕	封筒あり（※ 21495 ～ 21051 封筒一括「証書添」）※京都時代カ
21496		—	10 月 18 日	〔松茸礼状〕	※京都時代カ
21497		—	3 月 8 日	〔銘酒の礼に鶴一羽送付〕	「代舌」「鶴一羽もらひ合セニ付懸御目」※馬路時代カ　※ 21496 ～ 21451 同封

21498		—	2月8日	〔手製の百合粉の披露〕	「口上」武平太夫人に桶を借りてつくる、※馬路時代カ
21603		—	—	〔入手依頼状〕	「追啓」か、急の出立に際し　※いづれかに同封のものか